

偽マカリオスにおける魂浄化の三段階

土 橋 茂 樹

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び踊れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。
(イザヤ書35章1節)

本稿は、エジプトの大マカリオス¹⁾の名を冠した靈的著作群（いわゆるマカリオス文書）に即して、その真の著者である「偽マカリオス」²⁾（以下では単に「マカリオス」と呼ぶ）による魂浄化の教説を、従来なされていた図式的な解説³⁾——〔1〕悪が内在し支配する魂、〔2〕聖霊と悪とが共に内在する魂、〔3〕悪が追放され、ただ聖霊のみが内在する魂、といういわゆる三段階説——にテキストに即した新たな角度からの哲学的解釈を加えることによってより一層明確化し、そうした魂浄化の道行きが人間の生においていかなる意義をもち得るかを解明していこうとするものである。

そもそも説教や書簡などから成る自らの靈的文書においてマカリオスが一貫して論じ、またキリスト教信仰の究極目標として求めているのは、魂の浄化、すなわち様々な悪しき情念からの解放（ἀπάθεια）⁴⁾であり、心身一如となった一人の人間全体としての成熟完成である。しかし、そうした目標に到達するまでの魂の道行きに関する体系的な叙述は、彼の書物には見当たらない。したがって、マカリオスに固有な人間の内的な成長過程を見渡す見取り図とでもいふべきものを検討するためには、まずもって彼自身の数々の説教集や書簡の中からそれらを再構成することが必要となるが、そうした再構成の試みが最初に行われたのは、皮肉なことに、マカリオス文書を異端派メッサリアノイのものだと断ずる証拠となった反メッサリアノイ派の異端論駁の書においてであった。

I 魂の浄化にいたる三段階——そのメッサリアノイ的図式

メッサリアノイ (*Μεσσαλιανοί*) とは、「祈る人々」という意味のシリア語の音をそのままギリシア語綴りに置き換えたもので、その名が初めて文献上に現れた 370 年代にはシリア、メソポタミアが活動圏であったが、またたくまに小アジアに伝播し、その後 431 年のエフェソス公会議で彼らとしては最初の断罪が宣告された異端的宗教運動体である。彼らの教説や生活様式については、五世紀から八世紀にかけての反メッサリアノイ文書がその概要を伝えている。ここではそうした反メッサリアノイ文書として、キュロスのテオドレトスのもの (453年)⁵⁾、コンスタンティノポリスのティモテウスのもの (600 年頃)⁶⁾、ダマスコススのヨアンネス (749 年以前)⁷⁾ のものを取り上げる。これらが概観的に伝えるメッサリアノイの教説の中で、魂が完全浄化に至る過程に関する記述を魂の様相の変化という観点から析出してみると、以下のような三段階となる。

- [i] 「悪霊は生まれてきた人間一人一人に直ちに結び付き、その者を愚かな行為へと駆り立てる」(*Th.* 429C3-5) / 「[魂の] 内に住まう (*ἐνοικος*) 悪霊」(*Th.* 429C8) : 「アダムの墮罪以降、悪霊は実体として、生まれてきた人間一人一人に直ちに結び付く」(*Ti.* 1) / 「人間と共にある罪の根」(*T.* i2) : 「悪魔は実体として人間と共に住まい (*συνοικέω*)^{ウーソドーフス}、あらゆる点で人間を支配する」(*J.* 1) / 「悪魔や悪霊どもは人間の精神をわがものにし、人間の本性は悪の諸霊と交わりをもつ」(*J.* 2)
- [ii a] 「悪魔と聖霊が人間の内に共に住まう」(*J.* 3) / 「霊的な人々は、自らの内でも外でも、罪と恩恵とが働きを受けたり与えたりするのを見る」(*J.* 9)
- [ii b] 「持続的な祈りは、罪の根を根こそぎ引き抜き、しかも始めから [魂と] 一つに結び付いていた悪霊を魂から追い出す」(*Th.* 429B16-C3) / 「洗礼であれその他の何であれ、魂を解放することはできない。それができるのは、ただ祈りの力だけである」(*Th.* 429C5-7) : 「洗礼は悪霊

の追放になんら寄与するところがない」(Ti. 2)／「熱心な祈りだけがこの悪霊を追放することができる。……[悪霊が追放された]後に、聖霊の臨在が祈っている者に生じる」(Ti. 3)：「洗礼は人間を完成させず、神的な秘蹟への参与も魂を浄化せず、ただ彼らの熱心な祈りだけがそうするのである」(J. 4)

- [iii] 「彼ら [メッサリアノイ] は、聖霊の^{エピフオイトーニス}到来を感覚すると言う」(Th. 429D4-432A1)：「聖霊の臨在が祈っている者に生じる。すなわち、聖霊が到来し、それが感覚的に知覚されるのである」(Ti. 3)／「魂は自らに生じる天上の花婿との^{コイノニア}交わりを感覚する」(Ti. 4)：／「[魂は]あらゆる感覚と確信とによって聖霊に与からねばならない」(J. 7)「魂は天上の花婿との交わりを感覚せねばならない」(J. 8)

以上の内、魂における〈[i] 悪霊の内住〉と〈[iii] 聖霊の臨在〉は三書に共通に見いだされるが、〈[ii a] 悪霊と聖霊の共住〉は J. にしか現れない。Th. と Ti. ではむしろ〈[ii b] 祈りによる悪霊の追放〉が強調されている。要するに、[i] から [ii] に至る手段、すなわち悪霊の追放に関する祈りの有効性と洗礼その他の秘蹟の無効性を強調したのが [ii b] であり、それに対して悪霊の完全追放に至るまでの過渡的な魂の様相を強調したのが [ii a] である。ただし、聖霊の到来が悪霊の完全追放の後なのか、あるいはそれ以前に両者が混在する時期があるのか、という点に関しては、Th. は不明、J. は後者を採るのに対し、Ti. は先に引用したように悪霊が追放された後に聖霊が到来する、すなわち「彼ら [メッサリアノイ] によって〈⁷情念からの解放〉と呼ばれている事態の後で、魂は自らに生じる天上の花婿との交わりを感覚する」(Ti. 4) と証言している。では、悪霊を追放する唯一の手段と言われている祈りについて、果たしてそれは神からの恩恵なしに可能なものなのだろうか。そもそも祈りとはいかなる営みなのか。こうした問いに対して、Th. と Ti. の伝える答えはきわめて即物的なものである。すなわち「[魂の] 内に住まう悪霊は、[祈っている者の] 鼻水や多すぎる唾液によって [魂から] 出ていく」(Th. 429C7-9)／「祈っている者が咳ばらいをしたり唾を飛ばすこと

によって、この悪霊は追放され、しかも煙やへびの姿で〔人間から〕立ち去るところが見られるという」(Ti. 3)。この点に関するこれ以上の証言は、反メッサリアノイ文書には見いだされない。

以上より、メッサリアノイに固有な魂浄化の三段階とはさしあたり、魂における〔i〕悪霊の内住、〔ii a〕悪霊と聖霊の共住／〔ii b〕祈りによる悪霊の追放、〔iii〕聖霊の到来、と要約できる。その際、きわめてメッサリアノイ的な教説上の特徴としては、悪霊の実体化、善悪二元論、粗野な物質主義、祈りの重視、洗礼その他の秘蹟および断食その他の禁欲的修行の否定 (Th. 429 B13-16/Ti. 2,9/J. 4,5)、きわめて強い感覚・経験主義が挙げられる。いずれにせよ、今まで見てきたように時代を違えた三つの反メッサリアノイ文書が、同一の、ないしはきわめて類似した語彙や章句によってメッサリアノイを記述している以上、これら三書には共通の資料的背景があったものと思われる。それこそがマカリオス文書であった。

Ⅱ マカリオス自身の三段階説——その図式的再構成

マカリオス文書は以下に見るように明らかにメッサリアノイ的である。しかしそれはⅠで見たような特徴をすべて備えているという意味でそうなのではない。前述の反メッサリアノイ文書がマカリオス文書からの単なる恣意的抜粋に過ぎない以上、断片的な照合が可能なのは当然であるとしても、その真意をどれほど伝え得ているかは甚だ疑問である。したがって、我々としてはマカリオス文書中に果たしてⅠで見たような魂浄化の三段階が実際に説かれているのかどうかをまず調べてみる必要がある。

まずマカリオス文書に頻出する、魂における霊の内住を表す語彙群（内住語彙群と呼ぶ）に着目してみよう。内住語彙群とは、霊的存在の魂における内在を表示する「(内に／共に) 住まう」という動詞 (*οἰκέω*, *ἐνοικέω*, *κατοικέω*, *συνοικέω*) や、それから派生した名詞 (*ἐνοικήσις*)、形容詞 (*σύνοικος*) のことを指し、主語として悪霊を取るか聖霊を取るかによって以下のように大きく二分される。

〔1〕心・魂の内に悪 (II. 16. 6) / 罪 (II. 2. 3; 2. 4; 14. 1; 15. 24; 19. 2; 19. 6; 43. 5; 45. 2; III. 26. 3. 1) / 闇の霊 (II. 42. 3) / ヘビ (II. 45. 2) / 悪しき風 (II. 2. 3) が住まう。

〔3〕心・魂の内に王たるキリスト (II. 15. 33) / 主 (II. 14. 2; III. 25. 2. 4; 25. 6. 3) / 主キリスト (II. 28. 2) / 神 (II. 49. 4) / 聖霊 (II. 5. 7; EM9, 11, 15, 17) / 天の力 (II. 50. 1) / 神の恩恵 (II. 50. 3) が住まう。

以上の内〔1〕は、内住語彙群が多用されることも含めて先に見たⅠの〔i〕と完全に対応している。それに対して〔3〕の場合、Ⅰの〔iii〕では聖霊の「到来」「臨在」「交わり」という表現のみで内住語彙群が一切用いられていない。しかしその点を除けば、聖霊が魂に内在するという段階の表示としてこれら両者は対応していると言える。ここでも問題となるのは〔1〕と〔3〕の中間段階である。〔ii a〕におけるように内住語彙群によって悪霊と聖霊の混在が表示される箇所はマカリオス文書にはない。しかし、〔ii a〕に対応する段階としては、次のような例を挙げることができる。

〔2〕「〔心には〕正と不正の働く場が見いだされる。そこには死があり、生がある」 (II. 15. 32) / 「恩恵の働きの宿る人がいる。しかし、その内に密かに悪が存する。すなわち、光と闇の原理にしたがって、二つの存在仕方がある。それらは同一の心の中で覇権を争っている」 (II. 17. 4) / 「心がまだ浄められていないのに、その人に恩恵が臨在することがある」 (II. 26. 25) / 「魂の大部分はいまだに罪に支配され、ただその一部分だけが恩恵の下にある」 (II. 50. 4)

ここでは、恩恵と悪とが同時に経験される段階にある魂が示されている。これに対して〔ii b〕に関係するテーマ、すなわちもっともメッサリアノイ的な「祈りの重視」という特徴は、マカリオス文書においても枚挙のいとまがないほど頻出する。しかし、〔ii b〕のように、祈りが悪霊を排出するための身体的動作とのみ解されるようなことはマカリオス文書においては一切ない。マカリオスにあって祈りは、人間が本性的に行い得る「自然本性的な祈り」と、神の賜物としての「霊と真理をもった純粋な祈り」の二種に分けられて

いるが (II. 26. 21), その両者いずれにあっても心の働きの面が強調されている。ただし、前者は「心の迷いと乱れを伴っている」ため [2] に対応し、後者は [3] に対応するものと思われる。

以上を見る限り、反メッサリアノイ文書から再構成された魂浄化の三段階とマカリオス文書から再構成された三段階は、その図式的構成における限りではほぼ精確に対応していると言えるだろう。すなわち、魂における 1 悪の内在一 → 2 悪と聖霊の共在 → 3 聖霊の内在という三段階である。しかし、反メッサリアノイ文書に完全に欠落している要素がマカリオス文書にはある。それは意志⁹⁾に代表される主体の自発的働きである。悪霊と悪しき行為の因果連鎖に着目する立場と、そこに意志という主体の自発性を介在させる立場とでは、大きな隔たりがある。こうした意志の働きとその実相については、次節において詳細に検討せねばならないが、この点に限らずマカリオスとメッサリアノイとの相違点は決して少なくはないので、ここで若干触れておきたい。まず、悪霊の実体化に関してマカリオスは、「神にとって、悪は実体として存在してはいない。なぜなら、神は悪からは決して影響を受けないから。しかし、我々にとっては、悪は実在する。なぜなら、悪は我々の心に住んでいる [から]」(II. 16. 5-6) というように神/人間の二つの観点をとることによって明確化を図っている。そのことによって彼は、マニ教的な善悪二元論を実質的には回避しながら、同時に [1] の段階での人間にとっての悪のリアリティーをも保持しようとしたものと思われる。また、前述の祈りの例でもわかるように、彼にはメッサリアノイ的な物質主義の影はない。さらに、教会の権威、洗礼その他の秘蹟、断食などの禁欲的修行をすべて否定するという点については、むしろ逆にそれらを積極的に肯定する文言が数多くマカリオス文書に見いだされる (e. g. EM. 2. 3; 6. 2)。いずれにせよこうした累積する反メッサリアノイの証拠から、マカリオスのメッサリアノイへの帰属問題が争点となってきたが⁹⁾、少なくとも魂浄化の三段階説、その第 1 段階での内住語彙群、第 2 段階での祈りの重視、第 3 段階での「あらゆる感覚と確信によって」という句に象徴される感覚主義、以上の共通点を見る限りマカ

リオスはある面では確かにメッサリアノイ的である、否むしろメッサリアノイはその根幹では極めてマカリオス的であると言った方が適切であろう。

Ⅲ 三段階説の真相と意義——その哲学的解明

マカリオスの魂浄化の道行きに関するここまでの考察は、どちらかと言えば図式的なものであった。この点に関する従来の解説も、さしあたりはそうした図式的三段階説を採るのが通例である。しかし、そのような三段階説の真意を哲学的に深く取り沙汰するという試みへは、今まであまり目が向けられてこなかったように思われる¹⁰⁾。我々が以下に試みるのは、マカリオスの三段階説へのまさにそうした哲学的解明である。

〔1〕 魂における悪の内在——人間としての〈生のかたち〉

マカリオスにとって悪の实在とは、メッサリアノイのような物的实在性に関わるのではなく、あくまで人間にとっての心理的リアリティーに関わることである。しかも、それは個々の行為の道徳的な悪という面にとどまらない、もっと普遍的な相での問題である。その点を次のテキストにおいてまず見ていきたい。

ひとたび悪の種子が人間の心の中に秘密裡にそっと埋め込まれたならば、後は誰であろうと皆、自らの自由な意志にしたがってその悪を実行に移すばかりである。しかも、ほとんどの人はそのような悪がどこから忍び込んでくるのかを知ることもなく、むしろ自然に反する悪しき思いが次々に心から繰り出されては習慣化されていくために、それを何か自然な動きであると思って受け容れるのである。しかし、魂のもつ思いや考えは、実はそのような仕方とは異なった仕方で創造主によって人間性の内にもたらされたのである。(III. 25. 1. 2)

この箇所在先立って、いかなる人も教えも法も、悪しき行為を罰し善き行為を称賛しているにもかかわらず、実際は悪が世界を支配しているという「我が現に目にしている」経験的事実を一般的見解として提示した(III. 25.1.1)マカリオスは、そこから一握りの思慮ある者によってのみ把握され得る洞察

としてこのテキストを導入する。ここでの論点は、人は誰もが善を望み悪を望まないのに、その望まぬ悪を自らの意志で行うという点にあるが、主題化されているのは個々の行為の悪ではなく、むしろ魂の抱く「思い(λογισμός)」の悪である。そもそもマカリオスにおいて「思い」とは、意志(θέλημα)、良心(συνείδησις)、知性(νοῦς)、愛する力(ἀγαπητικὴ δύναμις)を含む包括的な概念であり(II. 1. 3; cf. II. 7. 8)、「自然本性的な思い」(λογισμοὶ φυσικοί)ないし「純粋な思い」(λ. καθαροί)と「悪しき思い」(λ. πονηροί)という二種の思いが区別されている。最初に創造主によって造られた(II. 15. 26)純粋で自然本性的な思いは、絶えず聖霊と共にあり(II. 12. 8)、神認識の能力を授けられ(II. 12. 9)、知性と良心によって導かれていた(II. 15. 34)が、アダムの墮罪以降、世に追放された「魂の思い」は、地上的な思いと混ざり合った(II. 24. 2)「世の思い」(λ. τοῦ κόσμου)(II. 15. 14)となり、その結果この生活世界に棲みついた人々は日常的な習慣によって「世の思い」があたかも「自然本性的な思い」であるかのように思い込んでしまう。しかし、そうした世の思いは、我々の自然に反する思い、悪しき思い、すなわち情念パトスにはかならない。要するに、このような「思い」の次元での錯誤が、アダムの墮罪以降、その末裔にいわば悪の種子として相続され、強制によるのではない自らの意志による悪を人類にもたらしたのである。実際、悪の種子すなわち悪しき思いは、〈思いの錯誤〉という形で人目につくことなく隠蔽されてはいるが、人間の悪への意志を絶えず触発し続けて止まない。しかも、いかなる賢者といえども「自らの内に住まう罪トプρασ」については無知であり盲目であり(II. 45. 1)、〈思いの錯誤〉を免れることはできない。以上より、悪の隠蔽性および自己に内在する罪に対する無知・盲目性が、アダムの末裔たる全人類に普遍的に妥当する悪の特徴とみなされ得るであろう¹¹⁾。

さて、ここで再び「望まぬ悪を意志する」という論点へ戻ることにして、この点に触れる時、おそらくマカリオスの念頭には『ロマ書』第7章があったものと思われる。それは、第二講話において「ちょうどある人が鳥の飛ぶのを見て、自分も飛びたいと望むのだけれど、翼がないので飛ぶことができ

ないように、人間にも、……自らの内に悪をもたず、常に神と共にありたい、と願う〈意志がある〉。しかし、人間にはそうすることが〈できない〉のである」(II. 2. 3) と語る際の、「意志がある」(τὸ μὲν θέλειν παράκειται) (ロマ 7. 18) という句の引用からも窺えるところである。いずれにせよ、パウロにおける無抑制(ἀκρασία)の問題は、マカリオスにおいては今引いた箇所からも明らかなように、「意志するができない」¹²⁾という形で継承されている。先にも見たように、人は誰でもが規範(律法)に則した善行をなそうと意志するが、その規範(律法)が、たとえば「淫らな思いで他人の妻を見る者は誰でも、すでに心の中で姦淫を犯したのである」(マタ 5. 27f.) あるいは「誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けよ」(マタ 5.24) さらには「あなたがたの敵を愛せ」(マタ 5. 39) などというイエスの言葉に見られるように、人間本性を超絶した遂行不能なものであるとしたなら、人はそれを完全に拒否する場合を除けば、むしろ逆にその規範(律法)を自分が実行できる程度に緩和していきがちである。つまり、「意志するができない」から「できることを意志する」への転換がそこに生じるのである。ところが、マカリオスにとっては、この意味での「自らの権能の内にある(自らが左右できる)」(ἐφ' ἡμῖν) = 意志¹³⁾こそが罪・悪の温床である。なぜなら、この世界に生きる人間の「思い」はそれだけで既に地上的な生の規則に服する「世の思い」であり、天上的な善の規範すなわち律法と対立するものなのだが、「できることを意志する」とはまさにこうした神の律法を世の思いへと頹落させることに外ならないからである。思いにおけるこうしたすり替えこそが、マカリオスにおいて問題となっている罪なのである。たとえファリサイ人のように旧約的な「汝なすべし」という律法を万事遺漏なく遵守していると自負自足していようとも(むしろそうだからこそ)、この意味では罪に対して無知・盲目なのである。

自然に反する悪を悪として意志するのではなく、むしろそれを自然に則し、律法に則したものとして意志するところに、人間に普遍的に妥当する〈思いの錯誤〉としての罪がある。然るに罪が思いの錯誤である以上、人が自らの

思いによってその罪から脱却することは、その当の思いが再び錯誤に陥るが故に原理的に不可能である。では、このような〈思いの錯誤〉からの脱却不可能性それ自体は一体何に由来するのであろうか。そもそも人間には、ちょうどある国に生まれた者がその国の法に従わねばならないように、この世界に生きる限りは従わねばならない規則・規範があるはずである。しかし、それは国法のように明文化することも対象化することもできない。なぜならそれは、ただそれに従うことなしには人間がこの世界で人間として生きていけないという仕方ではしか捉えられない規則であり、「なすべし」という規範性の明（意識）が自然本性の暗がり（無意識）へと溶解し去る、まさにその消失点においてしか存在し得ないいわば人間の人間としての〈生のかたち〉だからである。したがって、こうした〈生のかたち〉は、一方であたかも自然本性の如きものとしてことさらに問いただすまでもない、文字どおり自然で自明なものでありながら、他方で一旦それを生のただ中で把握しようと思うと、まったく把握不能な、我々を盲目性の内に行ませる外ないものなのである¹⁴⁾。然るに、こうしたいわば地上の律法に服し、〈生のかたち〉に編み込まれているものこそ、「世の思い」である。つまり、世の思いは自らの基盤である〈生のかたち〉自身に関してはまったく把握不能な盲目状態にあり、しかもそれは常に生のただ中で思いであって、自らの生を全体として眺め得る外部からの視点をもち得ないのである。このような世の思いに、自身の生の外部から神の律法が課せられる時、世の思いは自らが生の外部へと超出できない以上、律法の方を〈生のかたち〉の勢力圏へと引き入れざるを得ない。しかしその時、世の思いは、自らが「自然本性的な思い」として、しかも神の律法を意志しているのだ、という二重の錯誤を犯す。そこに罪の始まりがある。それ自体、善悪無記の〈生のかたち〉が、神の律法と対立する罪の地平として立ち現れるのはまさにその時なのである。この限りで、思いの錯誤に由来する罪からの脱却は、人が人として生きる限りは不可能である。なぜなら、神の律法に向けて自らの〈生のかたち〉から離脱することは、すなわち生活世界における死を意味するからである。したがって、〈生のかた

ち〉に基礎付けられた世界内での〈生〉からこの意味での〈死〉への離脱を可能とするのは、その離脱の意味を「死に支配されたこの身体」(ロマ7.24)から真の生命の与かりへの飛躍という形で一挙に逆転し得るこの生活世界にとって外在的な視点すなわち神からの恩恵ただそれのみとなる。では、人間はただひたすら神からの救いを求めるしかないのであろうか。それが次の第2段階の課題である。

〔2〕 魂における悪と聖霊の混在——〈信〉に基づく霊的戦い

罪悪に支配された第1段階には、実はそれに先立つ段階、すなわち墮罪以前の最初の間人アダムアダムの段階がある。そのゼロ段階において、神は自らの似像に従って人間を「良きもの」として創った(創：1.25f.)のだが、悪がその魂を自らの衣として纏ってしまったため、神は自らの住まいであり神殿である人間を悪から奪還すべくこの世界へと降り来ることとなる(II. 1. 7; III. 24. 4)。場面は既に第2段階である。この段階では図式的理解に基づく次の二つの誤解を避けねばならない。すなわち(イ)善の原理(聖霊)と悪の原理(悪霊)とが戦い、勝利を収めた方が魂を支配する、という善悪二元論による合理的解釈、(ロ)善の原理(聖霊)と悪の原理(悪霊)を横並びの選択肢とし、そのどちらかを選択意志が選び取るという解釈、この二つである。(イ)は明らかにメッサリアノイのものであり、その主体性の欠如という側面が心の霊性を事とするマカリオスと対立する。他方(ロ)では、マカリオスにとっての選択があれかこれかの選択ではなく、まさに自らの生を賭けた〈生の選択〉¹⁵⁾であるという認識が欠落している。そこでこうした誤解を避けるためにも、まず「神／我々にとって」という二つの観点から第2段階に該当するテキストを組み直してみる必要がある。

まず神にとってこの段階は、自らの似像に従って創られた人間が、たとえ自身の自由意志によってであれ、然るべき(すなわち自然本性的な)思いから逸脱し(II. 16.1)罪に墮ちたが故に被った魂の傷と心の墮落を癒し更生するために(III. 25. 3. 3)、また悪の手から魂を取り戻すために展開された悪との戦い(III. 25. 4. 2)の段階である。確かにこの観点から見る限り、戦いの

主体は神であるように見える。しかし、そもそもあらゆる力と権威をもった神に敵対し得る者など存在せず (II. 1. 9), むしろ魂の〈思い〉・意志がそこに介在することによって、神にとってはそれまで存在し得なかった悪という敵が、魂の争奪を賭けた悪との戦いという構図と共に初めて立ち現れてくるのである。実際、魂を意志的存在者として創造した以上、神は魂に悪からの離脱を強制するわけにはいかず、しかもここでの魂の罪が理性と非理性的欲望との分裂葛藤にではなく魂のもつ思いの錯誤に起因する以上、理性への説得という形を取ることもできないのだから、神にとってはただ魂と共同戦線を張ることによってしかこの戦いに加わる方途はない。すなわち「人間の側からの協働と努力なしに、神の力と恩恵によるだけで人が成長し続けていくことはできないし、逆に聖霊からの協力と救いなしに、人間自身の力と努力と強さによるだけで、完全に神の意志するところ、つまり自由と浄化にまで至ることはできない」(EM. 3. 1)。

他方、魂にとってこの段階は、「聖霊からの協力と救い」(ibid.) に援けられながら、悪しき思い、悪しき情念から自らが解放されるために繰り返され、しかもその勝敗が魂自らの意志によって決する戦いの段階である (III. 25. 2.2)。この観点からする限り、戦いの主体は魂、とりわけ意志である。では、マカリオスによって競技・競走とも禁欲的修行の労苦や努力とも言い換えられるこの戦いの実相とは、一体いかなるものであろうか。確かに、「魂はこの世の霊と神の霊という二つの霊と交わって一つになるべきではなく」(EM. 3.9) どちらか一方と合一すべきだと言われる限りでは、世の霊か神の霊かの二者択一が求められているように見える。しかし第1段階での解釈によれば、この世の霊とは、隠れた地上の律法すなわち我々が現にそのただ中に居ながらあくまで把握不可能な〈生のかたち〉に帰属するものであり、他方神の霊とは、我々の生を超絶したものでありながら、〈生のかたち〉に基礎づけられた「世の思い」によってしか、つまり〈思いの錯誤〉によってしか我々には把握され得ないものであった。つまり、悪霊と聖霊という選択肢は、そのいずれもが我々には指示不可能なものであり、そもそも選択自体が成立し得

ないのである。では、我々の意志はいかなる選択にかかわるのであろうか。

その問いを解く鍵は、旧約の律法の真の成就を説くイエスの教えが人間の力を越えたものであるという点にある。第1段階では、そうしたイエスの遂行不可能な命令に対する「意志するができない」→「できることを意志する」という〈思い〉の変換に罪の萌芽を見たが、そもそも何故そのように人間性を超絶した律法をイエスが課したかと言えば、そうすることによって「できない」と「信じる」¹⁶⁾という二つの態度決定を人間にもたらし、そこに選択意志の発動を促そうとしたからだと思われる。その点を『大書簡』13章では、イエスの言葉に懐疑を抱く者と文字通りに信じる者との対比として詳述している。前者は、イエスの言葉を「信じていなければ努力もしていない、ただ自分自身の意志や判断だけを確信し、あてにしている人々」(EM. 13. 8)であるが、後者は「人間においては不可能なことも、約束の神においてはすべて可能である」(EM. 13. 10)のだから、イエスの言葉を信じて行えば、人間自身には不可能な罪からの脱却も必ずやなし遂げられると信じている人々である。たとえば「〈心の中でさえ〉姦淫するな」という同一のイエスの言葉が、一方では「世の思い」によって「意志するができない」故に「できることを意志する」という仕方(たとえば「〈実際には〉姦淫するな」「〈人目につく仕方〉姦淫するな」というように)頹落していくのに対し、他方では「意志しかつ信じる」という仕方であくまで神の律法として、決して頹落した形でなく顕在化される。ただし世の思いは習慣の力によって極めて強固に人間を拘束しており、信の力が弱まればたちまち世の思いに取り込まれ、神の律法は頹落する。信がなければ、神の律法はその真正な姿を顯示し得ないのである。この二つの態度によって、我々にはその背後に控える二つの律法——隠れた地上の律法(〈生のかたち〉)と神の律法、さらに二つの世界、二つの生が予示される。つまり、人間の自然本性にとって実現不可能な律法に対する「できない」/「信じる」という二通りの態度決定が、自らの生の選択に連動してくるのである。我々の選択意志が働くのは、まさにここにおいてである。

しかし、あくまでこの生のただ中での信である以上、絶えず世の思いという逆風に晒され続ける信を堅持していくのは至難の技である。だからこそ、マカリオスはそうした信に根差した忍耐と努力を、修道上の労苦として強調するのである。と同時にそうした労苦は、信をなし崩し的に取り込んでいこうとする自らの世の思いとの戦いをも意味している。信の無力化を目論む自らの思いと徹底して戦うために、「自らの心の内に留まって悪魔との戦いを指揮し、自己自身を憎み、自己を否認して制し、自己に憤り、自己を責め、内面の貪欲さに打ち勝ち、〔自らの世の〕思いに抵抗する、要するに自己自身との戦いに耐える」(II. 26. 12) ののである。砂漠での禁欲行の第一の目的は、すべての欲望の対象を身边から遠ざけることにはではなく、むしろこの自己の思いとの戦いに沈潜することにある。世の思いに具現された〈生のかたち〉を信の力によって拒絶していく戦い、その最深部には〈生のかたち〉を最も象徴的に具現している「世の言葉」(II. 46. 1) を解体していこうとする祈りというそれ自体言葉による行為¹⁷⁾があるが、いずれにせよそうした戦いそれ自体が思いの働きである以上、世の思いを根絶することは我々には不可能である。だからこそ、人は神の許に進み出て「これまでの生において、屠られ、殺されることによって、神と共に暮らす別の生へと移っていかねばならない」(II. 1. 8) ののである。

〔3〕 魂における聖霊の内在——神の意志と人の意志

第3段階に至って、悪が根絶された魂はようやく完全浄化を達成する。マカリオスはこの段階の魂の状態を、内住語彙群を用いた表現の他に「情念からの解放」、「心の静けさ」(ἀνάπαυσις)、「静寂」(ἡσυχία)、〔聖霊／キリスト／天上の花婿などとの〕^{コイノニア}交わりなどと叙述しており、さらにこの他に極めてマカリオス的な語彙群、すなわち感覚語彙群¹⁸⁾、混合語彙群¹⁹⁾、充滿語彙群²⁰⁾がこの段階に多様な彩りを添えている。これほど多彩な表現を尽くして彼が賛美し語ろうとしたことは、人間性の完成であり、新しい創造(III. 18. 2. 4; 20. 2. 2f.)であるが、ここではまず神の意志と人の意志との関係に的を絞ってこの最終段階を考察していきたい。

『50の靈的講話集』の冒頭においてマカリオスは、神の顕現に接したエゼキエルが神の王座となり靈の栄光に与かった魂、つまり第3段階の魂をケルビムとして語るくだりを極めて象徴的に解釈している。四頭の靈的生き物であると同時に乗り物でもあるというこのケルビムは、乗り手であるキリストに御され、彼の行きたいと思うところへ進んでいくのだが、ケルビムに象徴される人間の魂も同様に、その乗り手であるキリストが「魂の意志に従ってではなく」、キリスト「自らの靈によって」すなわち「自らの思慮^{フレーツ}によって手綱をとり」その意志するところへと魂を導く(II. 1. 3; 9)。この時、テキストの対応箇所 II. 1. 3 と 9 を比較してみると、キリストが天上に向かうことを欲する場合、「自らの思慮によって〔魂を天上へと導く〕」は「天上の思いによって〔導く〕」に言い換えられているのだが、キリストの靈が身体の内に入ることを欲する場合には、「〈思い〉によって魂を御す」が単に「身体によって〔魂を導く〕」とだけ言い換えられている。この後半部が我々には重要である。「身体によって」は「天上の思いによって」との対比から「身体内の思いによって」したがって「魂内の思いによって」と解することが許されよう。すると、単に「思いによって」とだけ語られているのは一体誰の思いなのか、魂の思いなのか、それとも身体・魂に入った聖靈の思いなのか、ここでケルビムの譬えに戻るなら、ケルビムは御者を乗せて運び、御者はケルビムを導くという仕方で、両者は完全に一体となって進み行く。同様に、魂は自らの思いによって行為し、他方聖靈は魂の内において自らの思いによって魂を導くという仕方で、その現に発現した思いに関する限り両者の思いは完全に一致し渾然一体となっている。つまり魂は、その完成態においては、キリストの思い・意志を自らの思い・意志とし得るのである(III. 21. 3. 3; EN. 2. 4)。第1段階では、このキリストの思いを自らの思いとすることができず、世の思いを自らの思いとせざるを得なかった。第2段階では、このキリストの思いをひたすら信じることによって世の思いから離脱する戦い、労苦に明け暮れた。そしてついに第3段階において、魂はキリストの思いで充たされたのである。

しかしこのような完成態の認識は神の観点からのものであり、魂の観点からは、世の思いもキリストの思いも共に自分自身の思いとしてしか立ち現れない以上、そもそもこうした各段階での思いを識別することは不可能なことである²¹⁾。救済という面で見てもそうである。魂は救済を求めるが、救済されたと思うのも思いである以上、思いの錯誤の可能性を払拭し得ない。もしマカリオスにおいて意図されているのが救済の探求であるなら、救済の成就がそこでの関心事となるはずなのに我々は決してそれを認識できないという背理が生じることになろう。しかし彼にとって救済を求めるということは、決して救済の探求ではなく、むしろ救済の成就を願う個我的思いそれ自体から魂自身が解放されることである²²⁾。換言すれば、魂の救済にとっての終極は、その成就ではなくむしろそこへと限りなく近づきつつある魂の内に引き起こされる変容そのものなのである。こうした魂の変容は、ただ自らによって経験され確信されるしかない。マカリオスに頻出する「感覚／確信／経験によって」²³⁾ という句が第3段階のメルクマルとなるのも、こうした事情による。マカリオスが理性的超越ではなく、むしろ経験や感覚を重視する態度は、決してメッサリアノイの経験主義によって解されるべきではなく、魂が自らの思いの成熟変容を自らの思いによって自覚するという、彼のいわば〈思いの哲学〉に由来するものと言えよう。もちろん、そうした思い・確信自体も神からの恩恵によるものであるが、この段階ではもはや魂の思いは神の思いと一つになっている。このこと自体が、魂による生の選択の成就であり、新しい人間の誕生と言えよう。世界という砂漠に赴き、自らの悪しき思いとの苛酷な戦いに耐えた魂は、やがて砂漠が緑の沃野に変容するが如く、光り輝く霊へと変容する日を迎えるのである。

註

* 本稿は、南山大学における第42回中世哲学会大会での研究発表の前半部分に大幅な加筆を施し、発表時とは異なる標題の下に纏めたものである。

- 1) Makarios (300頃-390年頃)。ナイル河口のスケティス砂漠に修道院を設立し、エジプト修道院運動の中心的存在となった霊的指導者。

- 2) 偽マカリオスおよびマカリオス文書の原典編纂に関する 杵余曲折に富む研究史の詳細、また彼とメッサリアノイとの関係については、拙訳『説教集』『大書簡』の各々の解説(『中世思想原典集成』第3巻(平凡社、1994年)所収、pp. 232-238, 276-279)を参照のこと。なお、使用した原典は、第2集成(いわゆる『50の霊的講話集』)が *Die 50 geistlichen Homilien des Makarios*, hrsg. v. H. Dörries, E. Klostermann, M. Kroeger, Berlin, 1964 [II. と略記]; 第3集成(『説教集』の底本)が *Pseudo-Macaire, Œuvres Spirituelles, I: Homélie propre à la Collection III*, tr. (avec le texte grec) par V. Desprez, Paris, 1980 [III. と略記]; 『大書簡』が *Makarios-Symeon, Epistola Magna*, hrsg. v. R. Staats, Göttingen, 1984 [EM. と略記] である。
- 3) たとえば K. T. Ware, Preface, in: *Pseudo-Macarius, The Fifty Spiritual Homilies and the Great Letter*, G.A. Maloney (tr.), New York 1992, p. xiii; C. Stewart. 'Working the Earth of the Heart' *The Messalian Controversy in History, Texts, and Language to AD 431*, Oxford. 1991, p. 74.
- 4) 元来はストア派の用語。しかし、他の教父同様にメッサリアノイもマカリオスもアパテイアを「[アダムの背きにより導入された] 罪からの完全な解放」というキリスト教化した意味で用いている。マカリオス文書中ではその語は全部で17回現れる。その中にはストア派的にアパテイアを健康と類比する箇所(II. 4.25)もあるが、魂浄化の最終目標として自由や完全性(τελειότης)と併記され(e.g. II. 17. 11-12; EM. 3. 14, 13. 3, 13. 8, etc.), エフ 4. 13へと結ぶ用例が中心である。
- 5) *Haereticarum fabularum compendium* 4. 11 in: Migne, PG.83, cols. 429-32. 以下 *Th* と略記し、欄数・行数を付す。
- 6) *De iis qui ad ecclesiam ab haereticis accedunt* in: Migne, PG.86, cols. 45-52. 以下 *Ti*. と略記し、原典中の整理番号を付す。
- 7) *De Haeresibus* 80, 2-3 in: Migne, PG. 94, cols. 728-36. 以下 *J* と略記し、原典中の整理番号を付す。
- 8) *θέλημα/προαίρεσις*. 後者は「選択意志 (liberum arbitrium)」とも訳す。両語はほぼ同義的に用いられており、自発性の強調のため両語に「自由な (αὐτεξούστος)」という形容詞を付す用例も頻出するが、本稿ではこうした語句を「自らの生の、その全体性における自己決定」という意味で用いている。
- 9) 拙訳解説 p. 236 参照。
- 10) たとえば L. Bouyer, *Histoire de la Spiritualité Chrétienne* I, Aubier, 1960, 特に pp. 443-6 が W. Jaeger, *Two Rediscovered Works of Ancient Christian Literature: Gregory of Nyssa and Macarius*, Leiden, 1954/5 に依拠して、マカリオス文書をニュッサのグレゴリオスの「通俗化」とみなしたことは、写本が整いつつあり、とりわけ R. Staats, *op. cit.* 以降むしろ両者の相互影響関係の研究こ

そが急務となっている現時点から振り返れば、マカリオスを哲学面で軽視した明白な例と言えよう。

- 11) H. Dörries, *Die Theologie des Makarios/Symeon*, Göttingen, 1978, S. 24.
- 12) イエスの教えに対する *I-will-and-I-cannot* という内的経験の描写として『ロマ書』を読み解いていく H. Arendt, *The Life of the Mind/Willing*, New York/London, 1978, pp. 63-73 に本稿は多くを負っている。
- 13) たとえばエピクテトスの語る賢者にとっては、生における「平静さ」*ἀταραξία*, *ἀπάθεια*) は「外的な領域」ではなく「自らの権能の内にある」領域に求められるが、彼にとってはこれこそが思いの領域であり意志の場である。
- 14) この点で「規則に従うとき、私は選択しない。私は規則に盲目的に従う。」L. ウィトゲンシュタイン『哲学探求』219節は実に適確である。
- 15) 「生の全体を包みつくす種類の選択」については、加藤信朗『『ピレボス』篇における道徳性の観念』『聖心女子大学論叢』第83集、平成6年、pp. 7-33 から多くのことを教えられた。
- 16) 当然マカリオスにおいても〈信〉(*πίστις*) は極めて頻出し、たとえば *EM.* だけでも全部で45回用いられる。その内「〈信〉と希望/愛によって(努力し/戦う)」という語の組み合わせを部分的にでも用いた箇所が13例あり、さらに〈信〉と意志とを結ぶ用例は、意志(の弱さ)を何らかの形で〈信〉が支えていくという構図のものが3例(3.1;13.13;13.15)ある。
- 17) 祈りを含む宗教言語の問題については稿を新たにせねばならないが、少なくともここで押さえておきたい点は、魂の浄化という脈絡における限りマカリオスは、祈りという言語行為をたとえば D. Z. Phillips の主張するような「ある一つの生活形式の内に」(*Belief, Change and Forms of Life*, London, 1986, p. 79) 位置付けられた宗教的言語ゲームとは決してみなすまいという点である。彼にとって魂浄化の戦いにおける祈りとは、日常生活における諸言語ゲームと宗教言語の通透性の有無が問われ得るようないわば一元化された地平そのものをむしろ無化していく行為である。
- 18) *αἰσθησις* を中心に、前置詞 *ἐν* と共に、あるいは単独に用いられ、その各々がさらに他の語、たとえば経験(*πείρα*) / 確信(*πληροφορία*) / 静けさ(*ἀναπαύσις*) / 力(*δύναμις*) / 働き(*ἐνέργεια*) / 真理(*ἀλήθεια*) などと組み合わせられる語彙群。この内、「感覚と確信(さらに他の1語ないし2語)によって」という組み合わせが全部で13箇所あり最多である。C. Stewart, *op. cit.*, pp. 282-284 に完全なリストがある。
- 19) (接頭辞 *ἀνα/συη*) + *κεράννυμι* や *μίγνυμι* によって、主/聖霊/恩恵などの神的力、あるいは罪/悪/情念などと信徒との混合を表す語彙群。名詞形 *κράσις* と *μίξις* も用いられる。この語彙群の全103箇所の使用例の内、罪との混合は15例、主/花

婿／神性および聖霊との混合が58例。完全リストは *ibid.*, pp. 286f.

- 20) πλήρωω (「満たす」) および名詞形 πλήρωμα を中心に (全64例中44例), 「恩恵／聖霊／主／キリスト／神など (あるいは罪／情念) が魂を満たす」という意味を表示するための語彙群。完全リストは *ibid.*, pp. 302f.
- 21) 第3段階に至れば, 「自らに強いて (μετὰ βίας)」(II. 18. 3) なされた律法遵守が「何の妨げもなしに (ἀνευ βίας)」(II. 19. 2) なされ, 「真に永遠の生を生きる」(II. 1. 12) 「完全な人になる」(II. 32. 6) と言われながら, その一方で「私は完全なキリスト者も完全な自由も見ることがない」(II. 8. 5) と言われるのは, 一見矛盾しているようだが, それは第2段階すなわち聖霊が到来したものの魂のわずかな部分しか占めていない時に, そうした経験のない者が「恩恵の到来によって罪が根絶やしされた」と思い込んでしまう (II. 50. 4) ことに起因する。つまり, 魂は自らの完成を識別観想することはできず, ただ自らの思いに従って, 「意志を〈信〉へと燃え上がらせ」(EM. 13. 15) 「その〈信〉が確信に充たされ」(*ibid.*) るよう努めるしかないのである。
- 22) M. Buber, *Eclipse of God*, London 1953, pp. 47f.
- 23) 註18参照。